

のは 宇宙生命の心持を知らないものすることだ。袋の裏は袋そのものではない。死は生命の表現そのものですら無いのだ。生命の表現の手助けをするのみなのだ。

強く生くるものには 死は少しも邪魔にはならない。死は勝利でも無ければ凱旋でも無い。強く生くる者に取つてのオーケストラの一節だ。死は勝利に呑まれる可きものだ！ 生命の反対ではない。生命の一節なのだ！ 生命があつて 死があるのだ。生命の反対を死と云ふのではない。生理的生命は土に還元する。然し生命そのものの法則が 疫病と老衰によつて破壊出来ると思ふか！ 法そのものが生命なのだ！ 宇宙生命は 破壊は出来ない！ 破壊出来るものは ただそれだけのものなのだ！ 人間の破壊出来る部分は 自己が作つた部分だけだ！ 死によつて 人間の創作した凡ての罪悪と 不浄が破壊せられる。「罪の価は死なり」とは此意味だ！ 人間が作つたものを 自ら破壊に導くと云ふことだ。然し 神の作つた部分は 人間では破壊出来ない。

無用なる努力 涯しなき徒勞をやめよ！ 自殺とその効果は 自己の实在性に対して何の破壊をも企て得ないのだ！ 神の意志によつて生れ出でたものが 神の意志なくして どうして取り去られようぞ！ それは平面を換へただけだ！ それは絶滅では無い。

人間に絶滅と見えるものは 神の絶滅では無い！ 法則と 勢力と 生命を何人が破壊し得ようぞ！ その法則と 勢力と 生命に裏書きせられた人間の魂の实在は 表面的物質の条件を破壊したからとて 消え去り得ない。消え去つたものは或現象である。

その条件は永遠に残る。

昨日の「汝」を「無」の「汝」と云ふことが出来るか？「汝」はそれを記憶の中に再現するでは無いか！ 昨日といふ一平面に立つた「汝」は消え去つても 今日と云ふ平面に「汝」は立たせられる。それは 汝自らの力でさうするのでは無い。「汝」を産み出したものがさうあらしめたのだ。

その同じ力が「汝」を前に突き出す。今日の「汝」が死んでも明日の「汝」は他の平面に 今日「汝」を再現するやうに立たせられ無いと何人が云ひ得るか！ 元来が自己が求めた实在では無いのだ！ 静かに 考へるが善い。死 即ち人類の前に常に立ち塞がるものは 決して实在では無いのだ。おまへ達の押しが強ければ強い程 後ろに退くものなのだ。

死は 生命に対して 何物をも附加しない。それは進化の補助者疲れたるものへの慰安 不浄なるものの掃除役にしか過ぎない。死の此辺は生命だが 死の彼岸も生命だ。死は生命の裏にしか過ぎぬ。

安心せよ 人間よ 私は永遠におまへの友人だ！

(さう云つて 死は静かに またその面袍で自己の顔を蔽うた そして何処にか消え失せて了つた)

鳳凰は灰燼より甦る

大地は波の如く揺れ 山々は大洋のうねりのやうに歩いた。

大地が海より這ひ出た日 山々が平地より抜き出た日 その日に

之を加勢したものは大地震ではなかつたか？

アラスカの山々は 一昨年生きものの如く歩き出して 行衛不明になつた。

西藏の山々も三里の道を歩いて突き進んだのは 去年の春ではなかつたか？

地球は生きてゐる。山も 河も 水も 空気もみな物を言ひ 進行する。

地震も暴風も 生物としての地球の眸の役目を務め 火焰は舌の任務につく。

山の歩く日に私は生れた。相模灘が四十尋陥没し 横浜は天空に舞ひ上つて行つて了つた。私はその日に生れた。

東京も乱舞して火輪の歌ふ声を聞いた。地球が発狂したのか？ 地軸をへし折つたのは何人だ？ 大地を支へたネフチューンはあまりの重荷に地球玉を前方に抛げ出したのか？ 横浜人と 東京人は

みな狂倒して 火の中に飛び込んで行つたものもある。

地球は何を物語らんとするのか？

語れ 大地よ 我等の間かねばならぬ言葉はそも何事だ？ ノアの洪水があつて以来 神はかゝる災厄を人間に送ら無いことを約束した筈ではなかつたか？

神は虹を指して誓つた筈ではなかつたか？

「総て肉なる者は再び洪水に絶たるゝ事あらじ。又地を滅ぼす洪水再びあらざるべし」(創世記九・一一)

神は水の災厄に就ては約束をしたが、火や地震に就ては約束をしなかつたと云ふのであらうか？

神は何故日本にのみこの苦難を約束するのか？

我等には笑顔をする東の間さへ無いではないか？ 天文 慶長

寛文 宝永 安政 大正と打続く本土の苦難に 民は瘦せ 魂は傾

き 晴れやらぬおももちに 胸はいつまでも圧せられて居るでは無いか？

『日本では 凡てが無常である』と漂着の詩人ラフカヂオ・ハーンをして云はしめた言葉は 不幸にしていつまでも 我等の魂を支配すべき格言であるのか？

あゝ紅蓮に追ひ立てられて 被服廠に集まつた四万の生霊の爲めに 私は神に謝罪を要求する！ 神は火の旋風に就て責任を持たない

いと云ふのか？

その日に虹は立たなかつたと云ふのか？ 日本よ 虹がないと云ふのか？ 火の中に虹がないと云ふのか？ おゝ健忘性の我が神よ 私は飽迄あなたの責任ある解答を要求する。

人間一匹の爲めには 天地全部が亡び失せても惜しくないと云つた人の子の宣言は 何処に書かれてあるのか？ 紙の上にか？ 万

有の法則の上にか？ 神は何故 此の緊急に耳が遠くなつたのか？ 全横浜は五分間にして倒れた。東京は二十四時間の内に半分だけ

焼けて了つた。地球はどれだけ人間の血を吸へば肥るのだ？

大地は口を開いて 人間を呑んだ！ 鯉でさへそんなに多数の人間を呑むことを遠慮するのに 大地は後々の思慮も無く 幾十万の

生霊を一度に呑み込んで了つた。横浜の犬が人間の骨で肥る前に 大地は人間の血で肥るのだ！ その爲めだ 大地が丸々と手毬のやうに肥つて居るのは。

血に飢えた大地よ 狂気せる無機物よ 地震と 海嘯と 地這と
雪崩の母よ 何故おまへは 私等人間を地の上に産んだのだ？

それはあまり残酷な手品であり、必ず落つ可き運命を持つ綱渡りでは無いか！ おまへは我等を綱の上に据え 両端を一度に切り落す悪戯の主だ！ 東京はその宿命の綱の上に置かれる！ 百三年目百三年目に その綱の片端が切られると云ふでは無いか！

宿命の綱が切れる！ そして無智なる泥人形はその上から落ちる。泥人形が毀れる。宿命の綱がまた張られる。それは蜘蛛が蠅を捕へるために巣を張るやうに 人の眼に見え無い。時間の上に綱が張られる。その綱までは百三年の距離がある。そこまで泥人形の群が綱渡りをする。そして綱の真中に都会を建てる！ それを綱上の都会と呼ぶ！ 空中楼閣もその手品には及ば無い！

綱上の楼閣に泥人形が住む。その泥人形は魂抜きだ！ 一個一時 間三十銭で肉の切り売り——そこを新吉原と云ひ 洲崎と呼ぶ。

そこにはバビロンにも見られなかつた罪悪が巣を組んでゐる。名は吉原！ その名の為めだけにでも綱は 切り落される必要があるかも知れ無いのだ。

あまり安価な泥人形に 天の使は賤ひを敢てしようともしないのか？ 綱上の楼閣が漸く出来上つた頃ほひ 綱は両方から綺麗に切り落される。

その綱は北緯五十度から 赤道直下まで続く日本列島の帯だ！

日本の帯は火に焼かれ 潮に浸され 暴雨に見舞はれ 天日に晒される。暴風の進路は必ず日本の帯の上を伝ひ 太平洋の狂瀾は日本を嘗めることを忘れ無い！ 天は何故 日本にのみ不公平である

のか？ 宿命の綱は 何故日本にのみ張られてあるのだ？

上野の丘に立つて東京を見てみるがいい。そこに何が残つてゐるか？ 残つて居るものは焦土と赤く焼けた瓦の破片ばかりでは無いか？ 人間は何処へ行つた？ 山の如く積み上げられた白きものは何だ？ それは人間の骨なのだ！

人間の骨は一荷幾十銭で売れるのか？ それはあまり美しく箱積みにせられてある！ あゝ それは吉原の売女の焼かれた骨だ。

その日東京は噴火した！ 百数十所の発火箇所は熱風に吹きまくられて 一つの焰となつて了つた 火焰は三万尺の高空まで達して雲を呼び集めた！ 雲は折り重なつて空を包み 帝都は蒸し焼きの運命を見た！ 此日には平常美しき武蔵野の層雲までが反逆した。見捨てられたる東京は焰の中に蒸発し、横浜は大地に吸ひ取られて了つた。焰の中に四匹の馬が走り廻つた。白馬 色青ざめた馬 赤馬 黒馬——それらは『死』と『破壊』と『飢』と『傷害』の騎士に操られた馬であつた！

何人もその馬を肉眼では見なかつた。然し天堂を凝視するものは燃え立つ火焰の中に 蠶の揺れる態を見た。

あゝ定められたその日に 現れなければならなかつた四匹の馬よ！ おまへは人間の頭の上を駆け廻つて何を見たか？

おゝ たゞ空しく泥人形が 再び泥に復帰するのを見たか？ 破壊の先駆よ 宿命の馬よ！

おゝ神よ あなたは私を泣く為めに作り 悲しみの子として地上に産みつけた。私はあなたの名の為めに十四年間を貧民街の路次で暮した。そして十四年後 漸く衣服を配り歩かなくてもよくなった時に あなたは一度に 私の護つた貧民街より幾百倍も大きな窮民都市を作り給ふ。

神よ 見給へ パラツクの陸に泣く嬰兒を見給へ！ 彼はあなたに地上に蒔き給うた花ではありませんか？ それだのにあなたは自分の名の為めに 彼等をお護りなさらないで母を彼等よりお奪ひになりました。トタン屋根の下に泣くあの悲しい声をお聞きになりませんか？ 私さへちつとして聞いて居られないのに あなたがちつとして聞いて居られる筈はないぢやありませんか？

神よ 見給へ 向うから気の狂うた若い母が来ませう。髪を振り乱し 着物を引き裂いて おどおどした足どりでこちらに来るではありませんか！ 瓦の下 煉瓦石の下を 一々のぞいて居るでせう子供が焼かれたのです！ それを尋ねて居るのです。あゝ母とその子に何の罪があつて あなたはこの災厄をお与へになつたのです？ 戦争の後のインフルエンザなら 私どもはその受く可き罰を受けます。然し 平和の時に罪もない嬰兒とその母は何を負はなければならぬ責任があつて この災厄に遭ひましたか？ 創造主よ 私はあなたに災厄に対する責任を難詰します。

私の友人の中では 私がこんなにあなたに 難詰することをさへ言つてゐます。彼等は云ひます。第一 私の云ふやうな神なんかありやしないんだ。神とは一種の阿片劑 一種の気休めで 齒痛に頬の皮膚の上から塗るヨヂウムチンキのやうなものだ。

さう云はれても仕方がないぢやありませんか？ 私の神よ こんな大きな災厄に対してあなたが責任を持つて下さらないとすれば、あまりに私の悲しみが大きいから 私はあなたに向つて眼を閉ぢませうか？

そして 無神無靈魂の世界を想像して見ませうか？ 秩序も何もない 偶然と冷たい法則の支配する世界を夢の中で考へて見ませうか？

大地震も 地泣りも 海嘯も 勝手に起つた『偶然』の仕事で誰れにも責任がなく 誰れも泣く必要がないのであると私は考へませうか？

世界は始めから『無』で『無』の上にとつた出来事は『無』の上に画いた『無』である為めに『無』の上塗であると考へさせて貰ひませうか？ 涙も 死も 災厄も 地震も 大火も被服廠跡の屍も凡てが嘘であつたと思ませうか？

さて不思議な夢見であつたと思ませうか？ その夢見のことも打忘れて了ひませうか？ 凡てを否定し 否定した上に否定して自分の存在をも否定しませうか？

涯しなき否定の後に 私は結局『私』と云ふものだけが『無』と『無』の間に吊り下げられて居ることを発見するのです。

前に進んでも『無』であり後に退いても『無』その間に苦き運命の綱が張り渡され 私と幾百万の生靈が被服廠の火の旋風の中に飛び込む為めに綱渡りをさせられて居ることを発見するではありませんか？

つまり 両端は始めから切り落されて居るのでした。その両端の

無い綱の上で私共は逆とんぶりをしたり 手品をしたり 軽業の芸当をしてゐたのでした。

これだけが 凡ての否定から嘲み出されたのです。そこに私の嘆きがあります。

夢を否定した その夢が私の生霊を脅かします。「無」も悪戯をするにも程があるぢやありませんか？

私は「無」を怖れます。だつて「無」は「無」だけで承知してゐて呉れないぢやありませんか！「無」の夫婦はいつも「現実」と云ふ私生児を抱いてゐるぢやありませんか？ よう育てもしない癖に「現実」を抱いて、夢から夢に彷徨するのが乞食の「無」です。乳を舍くまます ミルクも買つてあてがはず「無」は「現実」を産み放しにして 鬪り殺しにしますので。「無」こそシブ神です。「無」は口に血の滴る人間の首をくわへ 腰に髑髏を数限りなく結びつけ 足には焼け爛れた屍を踏みつけて居ります。

「無」は責任を持つてくれないのです。

私の神は 暴虐に対する難詰を受けても責任を回避しようとはなされない。

わが神 わが主よ 私があなたを難詰する理由がおわかりになりましたか？

私が 虚無論者になり得ぬが故に 私が冷たい無神論者になり得ぬが故に 私は煩悶するのです。私は私の魂の中に贖罪を意識する力を作り給うた神を疑ふことが出来ませぬ。それは實在の力です。

それは確かに生き給ふ神です。私はそれを眼を以て見ませぬ。私は耳を以つてそのみ声をきくませぬ。

然し どうして あなた——私の神——贖罪の神を疑ふことが出来ませうか？ 罪をすら贖はんとする大発心の神——それが私の霊の本願の中に燃え立つて居らせられるではありませんか？ 私はみ神の姿を外部に見ることが出来ませぬ。然し何と云ふ尊いみ姿でせう。私が正しく立たんとするその刹那より あなたは真直ぐに私の後押しをして下さるではありませんか？

その手を強く感じます。私はその御手の強い圧力に堪え難い程です。それが凡て社会に公義を求むる力であり 人類愛を請求する源ではありませんか？

そのみ手の働きを 私は春先の木々の芽ばえに 水蓮の花に 山に 雪に見出したではありませんか？

それは成長の御力として働き それは進化の法則として働き給ふ地上は限りなくみ恵みに満ち 天に行く星はみ栄の裝飾の如くに考へられました。

然し——突然 あなたは 地をして震ひ動かしめ 海をして嘯かじめ給ふ故に 人の子はまた御指先の働く方向が見えなくなりまして。

いつになれば明瞭に御姿の栄光を拝することが出来ますか？ いつになればあなたは 人間に対する脅を解除なさいますか？ それをお聞かせ下さい。それでなければ 私は安心して地球の上で仕事が出来ませぬ。

さうかと云つて 私共は自らの責任を回避するものではありません。あなたが地震と火事と人類に対する脅迫をお続けになるのであ

つても 私共は あなたに対する反抗は続けませぬ。私——少なくとも私だけは あなたの脅迫に対しては無抵抗で居りませう。

いや たとひ わが神が 私に向つて暴力に訴へてお出でになることがあつても 私は愛を以つてあなたに酬ひませう。

もう神だと云つて 暴に酬ゆるに暴を以つてする時代は過ぎたのです。私は神に接するに親切でありたい。私は昔流の呪の言葉なんか吐きませぬ。あなたも時折 私共の眼から見れば失敗もあるかも知れませぬ。繰返して申上げます。あなたの御指導のお蔭で人間も兎に角 一段と進歩いたしましたから あなただけが暴力を振ふ唯一の特権者でありなさるか存じませぬが 今度は人間があなたを教育する立場を取らして貰ふかも知れませぬ。

私は乱暴な姿をあなたのお姿として画きたくはありませぬ。私の胸に湧いてくる凡てがあなたから流れて来たものであることを知つて居りますから 私があなたより優越の地位に立つて居るとは決して思ひませぬ。

然し あなたも御存知の通り あなたは両面の神であらつしやいまして 私の内側にお住ひになる神は 愛と輝きの神 私の理想私の生命の源の神で居られますのに 私の外側におゐでになる神は常に進化と成長を掌り給ふ外に 随分乱暴をなさる方のやうに見えるのであります。

私はどちらをあなたの性質としてお選びませうか？ 私は勿論その二つの性質を別々に放して考へたくはありません。あなたの御性質には 私達の不行儀な うらたへた魂で御判断申上げ難い点があると思ひます。

然し たとひ 後の分が御神の性質の全部でありましたも（さうとは思ひませぬが）私達はあなたを殺したく思ひませぬ。反つてあなたを救つて上げませう。かう云ふとおかしな話になります。神と宇宙全体を修復する任務を私達人間が負はされると自覚した以上 私達は勇敢に任務につきます。そのために私が十字架で死なねばならぬ運命でありましたも 喜んでそれを選びませう。

然し——
その大きな決心を与へて下さつた方はあなたですから 私はどうしても あなたが私より以下の悪人であるとは どうしても考へられないのです。さうすると 神の御手の動きが私共に十分見えなと云ふことになりませぬ。

人間に戦争と 墮落と 高慢と 無駄が無かつたら 暴風を予知するやうに 地震を予知する内部的力を持ち得てゐたかも知れませぬ。

人間はあまりに墮落したために その高踏の力を失つたのでありませうか？

さうかも知れませぬ。
それにしても あなたが もう少し寛容で居て下さいまして 悔改むる期間を今少し長くお延ばし下さるなら どんなに幸福であるかも知れませぬ。

私は あなたが犯罪者を救ふ神で居らせられ 狂人をすら愛してゐて下さる神だと思ひますから あなたの慈悲に縋りまして 悔改むる時期の今少し延長せられんことを祈りたくあります。
否 たとひ 悔改むることが出来なくとも 罪なき嬰兒とその母

とを同時に火あぶりになさらないやうにお願ひ申します。

たとひそれが私人間側の不注意でありまして、どうかもう少し大目にて行つて下さい。甘え序に甘えさして下さい。わが神よ 父よ！

トタン屋根の下から東京は甦る。

銀座には蝗が飛び 丸の内には青草が繁り始めたが、東京は哭き女を雇はぬ中に甦る準備をした。

一様に平屋のトタン屋根が、曇り日の灰色の空に如何にもふさはしく 一様に薄青色をして居る。それは太洋の色である。一樣のうねりに街々が並んで居る。トタン屋根の白く粉のふいたところは波が砕けたところである。

あれ 太陽が雲間より覗く。すると 東京は鱗を逆立てて悦ぶ鯉のやうに見えるではないか？ 大波よ揺れるが善い！ トタン屋根の波よ 海嘯を起すが善い。おまへの潮流は何処を流れて居るか？ おまへの満潮時は何時頃だ？ 嘗て退潮を知らない。江戸よ 東京よ！ おまへは灰燼より束の間に甦るではないか？

暴風も 地にも 呪はれた地震も おまへを破壊することが出来ないではないか？ 火焰の旋風は おまへの上を通り過ぎる。然しおまへはそれに怖ぢない。おまへは新しい勇気を以つて海潮を運ぶおまへの動力は何処より湧くか？

困苦を怖れないトタン屋根の精よ！ たとひおまへの都を七十五年目毎に一回 全部火焰が嘗め尽しても おまへはびくともしない。強い精神をおまへは持つ。そこに江戸児の精髓がある。たとひ

百四十二年目毎に東京の大地が壊れ落つることがあるとも 悲鳴の一つだに上げないところに トタン屋根の下に蟄伏する靈の偉大さがある。

彼等は雨を防ぐ可き用意もなく 篠つく雨に骨の髄まで濡れる。それでも彼等は小屋掛けの下に雨傘をさして 夜の明けるのを待つ不撓の靈である。

畳もなく地べたの上に蓆を敷き 蒲団もなく 焼け出された日に着て出た衣服その儘で幾十日かそこに横臥して 猶辛胆に堪え得る靈こそ トタン屋根の主である。

互助の精神を知りたければ トタン屋根の主に会つて見るが善い 一椀の汁 一皿の菜でも 彼は一人で食するのを潔しとしない、三つのトタン屋根はそれを三分して喫する。

トタン屋根を覗けば そこに日本人に会ふであらう。たとひ一坪に足らぬむさくろしい小屋でも——犬も一月とは住み得ない——綺麗に整理して掃き清めてある。太洋の水は常に澄んで居る。その澄んで居るのは水全体として澄んで居るからではない。一滴の水が澄んで居るからである。見よ 一つのトタン屋根の下に動く靈が一つの透明なる一滴ではないか！ その清浄なる一滴が自分の持場を守る。そして 東京は瞬く間に甦る。

九月一日の午後東京を嘗めた火焰は武蔵野を焦土に化したと思はれたが 被服廠跡に山と積まれた白骨の処分がまだ充分済まぬ中に 東京は白骨の内より甦つた。此処にも 彼処にも槌の音が聞える。白木のバラックの棟上げが出来るのだ。

天地に轟く爆音に煙塵がセピア色をして 天空に捲き上つた二百尺

位の大きな黒い煙筒が砂塵の中に倒れるのが見える。それはあまりに心地よく倒れた。見て居る私は嬉しかつた。何と上手に倒すことよ。破片も送らず 爆発もささず それは完全に一本の箸の如く倒れた。見て居る私は その天を摩す煙筒が惜しいと思はぬではなかつた。然しあまりに心持ちよく倒れたことを見て雀踊りした。

あゝ あそこから東京が甦るのだ。あの爆音の底から新しい日本が甦るのだ。古い燻ぶつた煙筒を綺麗に片付けて そこから東京が甦るのだ。爆音が一つ轟く度毎に 私は神田の高い塔からそれを凝視した。そして その砂塵の中に新しい芽が見えるか否かを窺つて見た。その元氣善い爆発に 私は新しき生命の爆音を聞いた。

腐つた建築物はみな去るが善い。新しい東京はトタン屋根の下から甦るのだ。

火焰の旋風に翼を焼き落された鳳凰は灰燼の中より甦る。苦難を通過した鳳凰は火焰を喰ひ尽す術を知つて居る。

あゝ 鳳凰は灰燼より甦る！ (一九二三・九)

灰燼の中に坐して

九月二日の朝刊をみた私は その朝同志に機を飛ばして その日の正午に神戸山手の青年会館に集まり 関東救援の協議を遂げ 私と福音教会の佐藤君の二人は その日の午後四時に出る救援船山城丸に便乗することになつた。

九月三日の正午に 船は御前崎の真正面を急行してゐた。そしてその日の午後四時頃大島を見て通つた。大島は爆発も何もして居ら

なかつた。

船は午後八時半頃横須賀の火焰を見乍ら横浜に入港したが 港内からは何の消息もなかつた。たゞ軍艦のサーチライトと コレア丸の発火信号が急がしく瞬きして居るのを見ただけだつた。

横浜は未だ三箇所に火が燃えてゐた。その中でも神奈川のライジングサンのタンクが最も盛に燃えてゐた。その焰に二本筒のコレア丸の暗影が絵の如く水面に浮び上つてゐた。

その晩は特に暗れてゐた。それなのに横浜は死せるが如く沈黙してゐた。船は遂にその夜何等の消息を港内から得ることなくして港外に碇泊した。

一晚横浜港外に捨て置かれた山城丸は九月四日の朝未明に港内奥深く這入つて行つた。

横浜ドックに上陸した私達は、ドック会社の破壊のあまりに根本的なのに驚かされた。工場と云ふ工場 機械と云ふ機械 殆ど完全なものをも一つも見ることが出来なかつた。火災の余燼は九月四日の午前十時に到つても猶熄まないで その悲惨な光景は言語に絶してゐた。まるで戦跡の廃墟を訪うてゐるやうであつた。ドック会社の入口で群馬県の警部を初め巡査数名が看視してゐるのに会つた。

焼け残された車の上で 税関倉庫から失敬して来た雑貨を配分してゐるのを見た。倉庫は全部解放したために 殆ど掠奪の心持ちで群集が雪崩れ込み 各自に争鬭を始めたと云ふ。

桜木町から横浜駅に出て驚いたことは横浜が端から端まで丸裸のやうに瓦礫に化してゐることであつた。そこは文字通りの瓦と煉瓦石の沙漠で 家らしい家は山手の方に所々見えるだけであつた。街